広告特集
企画・制作
朝日新聞社広告局

紙上採録

持続可能な社会の構築に向けて
～地球環境基金の新たなスタート～

●主催／独立行政法人環境再生保全機構
●後援／環境省・経済産業省・国土交通省・農林水産省

地球環境基金

地球環境基金創設20周年記念講演会・シンポジウム

日本国内外の環境NGO・NPOを支援する地球環境基金が創設20周年を迎えました。11月29日には東京国際フォーラムで記念講演会・シンポジウムを開催し、全国各地から環境NGO・NPOだけでなく企業や行政の方々235名にご参加いただき、有意義な会となりました。あらためまして、地球環境基金を支えてくださっている皆様にお礼を申し上げます。

【あいさつ】

独立行政法人
環境再生保全機構理事長
福井光彦

地球環境基金は、1992年ブラジルで開催された国連環境開発会議（地球サミット）において、我が国政府がその枠組みづくりの意志を表明し、それを受けて翌93年に創設され、本年5月で創設20周年を迎えました。その間、地球環境基金は環境NGO・NPOの活動延べ3825件に対し、総額約131億円の助成を行ってきたところですが、日本の環境NGO・NPOは着実に団体数が増加し、個々の団体の成長も著しく、いまや環境NGO・NPOは環境保全活動を推進する上でなくてはならない存在となってきています。

私どもは様々な方々からのご意見をいただきながら、NGO・NPOのさらなる「国際的な発信力強化」「若手プロジェクト人材の育成」「行政・企業・大学等とのパートナーシップ強化」等につながる基金でありたいと考えておりますので、皆様にはご理解をいただきますとともに、ご支援、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

環境副大臣
北川知克

地球環境基金では、社会の動きに合わせ重点的な支援も行ってきました。最近では、東日本大震災の被災地において、自然環境の再生・復元活動や持続可能な地域づくり・街づくりなどを支援しています。また、生物多様性条約COP10やリオ+20といった国際会議に向けた活動に対する支援によって、民間の活動が大きく盛り上がりました。来年11月には「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するユネスコ世界会議」が名古屋市と岡山市で開催されることになっています。環境教育に関する多くの団体が、この世界会議に向け活動されていると聞いており、地球環境基金が有効に活用されることが期待されます。

環境省としても、環境再生保全機構との緊密な協力の上で、皆様方からの声を大事にして、引き続きタイムリーで社会のニーズに沿った活動につなげていきたいと思っております。

地球環境基金
運営委員会委員長
森嶌昭夫

地球環境基金は、日本の環境政策の一翼を担っており、国内だけではなく途上国の環境保全活動に助成するという責務を負っています。限られた財源のなかでプロジェクトを工夫しながら事業を行っているところですが、地球環境基金は環境保全活動をサポートする有力な基金でありますので、より一層の基金への支援をお願いします。

パネルディスカッション
「持続可能な未来のために ～NPOと企業、行政等との協働・連携について～」

トヨタ自動車株式会社 環境部
環境渉外室 プロフェッショナル・パートナー
西堤徹さん

特定非営利活動法人 エコ・リーグ
前事務局長
福島宏希さん

特定非営利活動法人 ACE 代表
岩附由香さん

川崎市 環境局 地球環境推進室 室長
大澤太郎さん

東京都市大学 環境学部 准教授
佐藤真久さん

一般社団法人 環境パートナーシップ会議（EPC）副代表理事
モデレーター **星野智子**さん

星野　NPO、企業、行政、NGO、そして有識者の方に、連携・協働のメリットやその在り方について伺います。

福島　私たちの「エコ・リーグ」とは、環境問題解決のために活動する青年や学生団体が学内・地域を超えて活動できるように、ネットワークの構築、サポートをする団体です。

企業や行政が若い世代に発信したいとき、どのような企画をすればいいのか分からない場合に、私たちと協働するメリットを感じてもらえると思います。逆に、エコ・リーグ側は、企業や行政などにあって自分たちにはないリソース・人・場所などを活用させてもらうので、実力以上の活動ができます。しかも企業や行政のネームバリューがあると、若者だけでは伝えきれない相手にも伝えられます。

若者と企業・行政が一緒に活動をすると互いの不得意な世代にも発信できます。

西堤　産業・企業側の立場からいうと、私たちの強みはやはり資金の提供、あるいはマネジメントとプロジェクトの能力ではないでしょうか。しかし企業人は、自然共生の専門知識、地元住民との関わりには不得手なことも多いかもしれません。**企業の強み、地域社会の強みを合わせてwin-winの関係が築けるといいと思います。**

私たちは「トヨタ環境活動助成プログラム」で環境NPOを支援しています。毎年、サポートすることが決まった20団体に集まっていただくのですが、意外にも横のつながりはないようです。もっとNPO同士の交流の場を充実させてもいいのではないかと思います。

大澤　川崎市での連携・協働による成功事例を挙げますと、日本のプロサッカーリーグ、J1の川崎フロンターレとの環境イベントがあります。等々力陸上競技場を囲む公園緑地で開きました。行政のメリットは、何よりも人気のあるチームの集客力や発信力を生かせることです。川崎フロンターレ側は、行政と一体で行うことで、地域に根ざしたスポーツチームとしての社会貢献をPRできたのではないでしょうか。ほかにも商店街や小学生、中学生と一緒に行い、地域の活性化にも役立ちました。このように**行政がサッカーチームや商店街と組めば環境活動だけではない効果にもつながります。**

岩附　NGO「ACE」は、世界の子供を児童労働から守る活動をしています。ガーナでは、カカオの生産で子供が労働を強いられています。そこで、森永製菓と協働で行っているのが「1チョコfor1スマイル」です。対象期間に対象商品のチョコレートを1箱買うと、1円がガーナなどの子供たちに役立てられます。ACEの支援地で採れたカカオを使ったチョコレートも発売されました。パートナーシップの最大のポイントは、「それぞれにしかできないことをする」です。ACEはチョコレートを作ることはできません。森永製菓は現地でプロジェクトを行うことはできません。「**それぞれにしかできないこと**」**をして、新しい価値を生み出すことができた**と思います。

佐藤　連携・協働は、「共有化されたビジョンのもとで」「目標達成のための手段」として行うものです。さらに、個人・組織・市民能力の向上にも役立つという特徴があります。またプロセスとして、参加性、対話性、公開性を持つことが望まれます。スタイルとしては、行政区分に基づく「タテの協働」、地域特性を生かした「ヨコの協働」がありますが、タテとヨコをつなぐような仕組みも必要ではないでしょうか。**現在、企業や行政とNPOの連携・協働というのが主ですが、その橋渡しをするプラットフォームのような中間支援組織や機能も重要になってくるでしょう。**

星野　連携・協働による成果は、日々の努力やアクションがあってこそだと思います。お話しありがとうございました。

基調講演
「はやぶさ」、やれる理由がプロジェクトを遂げさせた

川口淳一郎さん

独立行政法人 宇宙航空研究開発機構 シニアフェロー
宇宙科学研究所 宇宙飛翔工学研究系 教授

小惑星「イトカワ」に到着し、世界で初めて月以外の岩石サンプルを地球に持ち帰ることに成功した小惑星探査機「はやぶさ」。そのプロジェクトマネージャを務めた川口淳一郎さんが、数々の困難を乗り超え、なぜ人類未到の挑戦を完遂できたのか理由を語った。

「はやぶさ」のプロジェクトをどう遂げさせたのか

私がこのプロジェクトをマネジメントするにあたって、チームの協調性を優先したわけではありません。皆の言うことを「はい、はい」と聞いていたら、ベクトルが四方八方に向いてしまって動けなくなります。筋の通ったことをやるには、意見の食い違い、対立はさけられないのです。

では、「はやぶさ」はどうしたのか。いろいろな提案は必ず見える場で議論して、採否をどう決めたのか分かるようにしました。メンバーは、提案したってきちんと議論をしてくれないのなら、発言はやめておこうと思ってしまいます。私たちは、プロジェクトの最中に多くのトラブルに見舞われましたが、メンバーからの提案が途切れることなくモチベーションが維持できたので、プロジェクトをやり遂げることができました。

挑戦をやり遂げるには「やれる理由を探せ」

私たちの研究所には、「やれる理由を探す文化」がもともとありました。やれる理由を探すことは、とても難しいことです。会議が始まると、やらなくていい理由とやれない理由を語る人がたくさんいますが、それは何の役にも立ちません。誰も解決法を見つけられないなかでも、「こうすればできるのではないのか」と発言できる人に、私たちは期待を持つのではないでしょうか。「やれる理由を探して挑戦しない限り、成果は得られない」。これがプロジェクトをやり遂げるための私の考えです。そして大事なことは、「顔を上げて高い塔を作る」ことです。高い塔を建ててみなければ、新たな水平線は見えてきません。やれる理由をみつけて挑戦し、塔を高くしていくことで、日本の将来であれ、地球環境問題であれ、明るい未来が展開していくと思います。